



TITLE:

「フランチア」十号によせて

AUTHOR(S):

生島, 遼一

CITATION:

生島, 遼一. 「フランチア」十号によせて. Francia 1967, 10

ISSUE DATE:

1967-01-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137526>

RIGHT:

「フランチア」十号によせて

「フランチア」が十号になったので何か一言書けということである。

創刊号は昭和三十三年一月に出て、その巻頭に伊吹さんの発刊の辞（まえがき）がのっている。それには大学院学生で研究雑誌をもつことがかねがね企画されていたがやっと実現のはこびに到ったとのべてある。私も創刊号の合評会に出て、活発な討論をきいた記憶があり、その後もつねにこの雑誌の健康な成長をいのつていた。これが将来は大学院学生諸君の研究活動の一中心になるようにと念願していた。

今から五年ばかり前にちよつと危機があつた。印刷代が高くなり発行困難におちいりかけ、寄附行為で急場をしのいでいたことがある。何とか打開策を考える必要があつた。今フランスにいる梶野、佐々木、それに西川ら、また卒業生の沢田、山田（稔）らと相談し、伊吹さんの意見もきいて、ついに維持会員制を採用することにきめ、規約をつくつた。

この雑誌は、出発当時から、大学院学生の発表機関ということで、ユニツクな性格をもつ雑誌だ。どのようなシステムに切りかえるにしろ、この特徴はもちつづけて行きたい。維持会員も寄稿する。が、あくまで現役学生が主体として書いて行く。教授も助手も卒業生もみな平等に維持会員として協力する。こう

いう自由主義はあくまで伝統としてつづけたい。

創刊後九年、「フランチア」もとにかく成長した。古本屋の店頭にバックナンバーが見かけられるのはほえましく、よその大学から寄贈を求められるようになった。現在、「フランチア」は京大大学院の研究活動にとっては重要な役割をつとめている。将来、二年前からはじめた新しいシステムによって大学と卒業生諸君との連繫がかたくむすばれるための助けになれば、この雑誌のもつ意義はさらに大きなものになるだろう、これが十号を出す私たちの初夢である。

昭和四十二年一月

生 島 遼 一